

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 勝山市立荒土小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒 911-0045
福井県勝山市荒土町伊波2-28

E-mail : aradosyo@edu.city.katsuyama.fukui.jp

Website : _____

児童生徒数：男子 43 名 女子 43 名 合計 86 名
 児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

はじめに

『学び合い、助け合い、高め合う子の育成』の学校教育目標を達成するため、E S Dでつけさせたい7つの能力・態度を関連づけ、目指す児童像を設定した。

○学び合い：【批判】、【多面・総合】、【尊重】

問題を解決するため、多様な考え方ができる。

友達の考えと自分の考えを比較し、自分の考えを深める。

○助け合い：【協力】、【尊重】、【伝達】

自分の良いところや友達の良いところを見つけようとする。

仲間と協力して物事に取り組み、問題解決に取り組む。

○高め合い：【未来】、【伝達】、【参加】

互いに切磋琢磨し、目標達成に向けて意欲的に取り組む。

この3つの目指す児童像を達成するため、

○低学年では、身の回りの事象に興味関心を持つ態度を養うこと

○中学年では、自分の考えを持ち、相手に伝えること

○高学年では、身の回りの問題に気づき、その解決に向けて、自分たちができることを考える力をつけること

に重点を置き、活動に取り組んだ。

①低学年（1・2年生）

生活科の学習において、生き物（昆虫）に関心を持たせるための体験活動を行った。1年生は、学校の敷地内で見られる昆虫（バッタ、イナゴなど）を捕まえ、観察ケージでの観察や飼育を行った。2年生は、1年時の活動を発展させ、自分たちが捕まえた昆虫（チョウ、トンボ、バッタ、イナゴ、コオロギ、テントウムなど）を、体のつくりや特徴から、昆虫図鑑で名前を調べた。名前を調べた後は、年間でどのような昆虫がいるのかを分かり易くまとめるため、模造紙に貼り付けて整理した。



本校周辺は、多くの野生動物を育てることができる自然環境に恵まれている。低学年児童の生き物に対する関心を高めるため、生き物の観察会を不定期に実施した。取り上げた生き物として、本校で子育てを行ったチョウゲンボウやセキレイの巣内に小型カメラを設置し、ヒナの成長と子育てに励む親鳥の様子を観察した。また、本校が野鳥の通り道にあたるため、年に数回のバードストライクが発生する。それらの野鳥の亡骸で状態の良いものについては、野鳥に詳しい教員が、その特徴などの説明を行った。



②3年生

理科や社会の学習と関連付けて、荒土町の特色や町の自慢をまとめた。理科学習では、チョウの成長を学習した後、地域の川や用水路でよく見られる蛍（ゲンジボタル）に注目し、



初夏の夜にホタルの成虫（雄11匹，雌4匹）を捕獲し，およそ1600個の卵を産卵させ，ホタルの幼虫の飼育に取り組んだ。産卵した卵からは，およそ1500匹の幼虫が生まれた。蛍の飼育に取り組む前，児童は，ホタルは成虫だけが光るものというイメージしか持っていなかった。しかし，卵から飼育をしたことで，卵から光を発していることを知ることができた。また，孵化したホタルの幼虫の体のつくりは，チョウの幼虫と同じ体のつくりをしていること，そして，脚のつくり注目すると，成虫の脚のつくりと同じような脚ができていることを知り，教科書だけでは得られない事実を知ることができた。さらに，1500匹いた幼虫が成長していく中で，全ての幼虫が大きくなることのできないことに関心を持ったり，エサとなるカワニナが可哀想など，生きもの同士の繋がりにも関心を持つようになった。



③4年生

人と人とのつながりを体験し，その体験を通して感じたことをまとめ活動に取り組んだ。

○聴覚障害者と関わる

勝山市の社会福祉協議会と連携し，手話講師を招いて，手話による自己紹介や，歌を手話で表現する体験をした。その後，聴覚障害のある方と身につけた手話を用いて交流する場を設けた。



○お年寄りと関わる

隣町の野向の舎（老人介護サービス）を訪問し，お年寄りと1対1で話をしたり，お年寄りと一緒にできるゲームを考えたりして，一緒に楽しんだ。



○県外の学校と交流

i PadのFaceTimeを用いて，広島県北広島町新庄小学校と交流した。お互いの県のアピールを行った後，質問会を行い，お互いの県の良さを認め合った。

④5年生

地域の自然環境を知る活動を中心に取り組んだ。

ア) 地域の自然を探る

町内には里山の環境が残されている。その環境を生かすため，11年ほど前に地域の有志団体（荒土町ふるさと協議会）が炭焼き窯を復元し，周辺の里山から炭の材料となる落葉樹を切り出して，木炭を作ったり，周辺の山に落葉樹の苗木を植樹したりする活動に取り組んでいる。5月にコナラやミズナラなどの苗木を譲り受け，それぞれの木々の特徴などを観察し，里山の木々がどのように活用されてきたかを学習した（譲り受けた苗木は，山に植樹するまでの2ヶ月の間，世話をを行った。）。炭焼き体験では，炭ができるまでの流れを学習した後，原木を入れたり，出来上がった木炭を取り出したり，箱詰め作業の手伝いを行ったりした。その際，商品にならない木炭をいただき，木炭の特徴



を生かして脱臭炭を製作し、校内の清掃ロッカーに設置した。

イ) バイカモと周辺環境を調べる

地域を流れる温川（扇状地の中程から湧き出た水が集まった川）に準絶滅危惧種のバイカモが自生している。そのバイカモが水の流れを悪くするという理由から地域で農業従事者によって刈り取られている。そこで、バイカモが川の環境の中でどのような役割を果たしているのかを調べた。同時に、川の清掃活動を地域の団体と共同で行った。



ウ) 赤とんぼ調査

学校の校地に隣接している水田において、赤とんぼ調査を行った。水田から羽化したヤゴの抜け殻を回収したり、羽化直後の赤とんぼにマーキングを行ったりした。回収した羽化殻数とマーキングした赤とんぼ数は記録を残し、初夏から盛夏の期間中に羽化する赤とんぼの傾向を推測した。



⑤6年生

地域環境の保全活動に取り組んだ。5年時に調査したバイカモが自生する温川の清掃したり、同じ地域にある中学校の環境学習活動と連携し、地域の公園などに侵入してきている外来生物（セイダカアワダチソウ、オオキンケイギク）の駆除活動を行ったりした。また、街頭で、地域の自然環境についてアンケート調査を行い、その結果を分析し、地域の自然環境の保全を訴える看板を作成、設置した。



（2）活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（ _____ ）